日本の街道探訪　第15回

甲州街道（１）日本橋〜八王子宿

■図1　地図

* 甲州街道は日本橋から下諏訪まで２０９ｋｍの街道である。その道筋は、東西を結ぶ二大街道、東海道、中山道を縦に結ぶ街道とも云える。甲州街道の「江戸—甲府」間の開設は、慶長7年（１６０２）に始まる。その後、路線は、諏訪に向かって徐々に拡張整備されていく。甲斐の国、甲府は徳川家の親藩。六代将軍家宣は甲府徳川家出身である。ここで、江戸城の防御態勢に目を向けてみよう。江戸城郭の北には、広大な寛永寺、南には芝、増上寺（鬼門封じ）がある。東は、江戸湾による防御。そして西側には甲州街道沿いに防衛軍を配備する。江戸城が危機の時、まず、西へ逃れ、甲府で体制を整える（ここから駿府へも北へも逃れることができる）。家康は、かかる軍事上の目的から甲州街道の建設に着手した。その後、甲州街道の路程は中山道の下諏訪まで拡張される。そして世が安泰となった江戸中期以降から甲州街道は物流の重要ルートと化すのである。江戸から甲府までを表街道（37宿）と呼び、甲府から下諏訪までを裏街道（7宿）と呼んだのもこうした事情からである。
* 地勢的に見ると、八王子までは平坦な道だが、それから先は山道、峠道の難路が続く。全体の距離は200km強なのに宿場は44次もある。そのうち37宿が表街道にある。東海道、中山道に比べ、宿場間の距離は短く、宿場の規模は小さい。行き交う人々の交通量も少ない。その理由は参勤交代で甲州街道を利用した藩は、信濃高遠藩、諏訪の高島藩、信濃の飯田藩の3藩のみ（東海道159藩、中山道34藩）だから。

日本橋から内藤新宿まで歩く

* 甲州街道の出発点は、無論、日本橋だが（通常ルート：日本橋—呉服橋—和田蔵門—馬場先門—日比谷—桜田門—半蔵門）、実質的には半蔵門から西へ延びる四谷ルートが甲州街道の出発点である。半蔵門とはそこに服部半蔵の屋敷があったため付いた名。この街道の左右、四谷まで伊賀組、根来組､甲賀組、青木組（25騎組）から成る鉄砲百人組の同心屋敷が密集する。事あれば、徳川家親藩の甲府城まで将軍を護衛する構え。また街道沿いには砦用に多くの寺院が配置されている。そして四谷大木戸に着く。

四谷大木戸

* 街道から左を見ると、高遠藩内藤家の下屋敷（新宿御苑）の角が見える。そこに極めて堅牢な四谷の大木戸があった。高い石垣が道の左右に築かれ、これよりは低いが石垣塀が手前に続く。道路には敷石。門はないが高石垣の前には高札が立つ。荷を運ぶ馬の列、武士、身分の高い武士の駕籠を担ぐ家来の一行、道の端には多数の庶民、旅人。木戸に入る人（武士が多い）、出ていく人の群れ。これが威厳のある四谷大木戸の姿である。「江戸十里四方処払い」とは、西の方向ではこの木戸から先は自由放免を意味する。

■図2　江戸名所図会：中巻ｐ３００〜３０１：四谷大木戸の図

* この木戸から出て直ぐ左に厳めしい木戸番所が建ち並び、その後ろに、玉川上水が流れ、ここで水はさらに濾過され、地下の懸樋を通って江戸庶民の飲料水として配られる。そして余り水は、内藤下屋敷の東縁に沿って南に流され、いわゆる渋谷川の源流となる。この地下水道入り口には、水番所があり、給水を厳重に管理。
* この大木戸を出ると、最初の宿場、内藤新宿である。

内藤新宿

* 当初、内藤新宿はなく、日本橋から出発して最初の宿は高井戸宿であった。その距離は１６km。そこで高松喜兵衛など５名の浅草商人が立ち上がる。高井戸宿間に新しい宿場を開設してほしいと。幕府は審査。そして５６００両（現１０億円以上）の上納を条件に宿場の開設を許可する。この金を浅草商人が上納する。宿場の場所は青梅街道との分岐点（追分）と決まった。名前は、新しい宿なので新宿、内藤下屋敷の処なので、「内藤新宿」と決める。本陣の経営は言い出しっぺの高松家が運営。宿場は大繁盛。１７１８年の旅籠数は５２軒。ご多分に漏れず、岡場所も大賑わい。ところが八代吉宗の「享保の改革」、風紀取り締まり令で、宿場は解散。しかし、１７７２年、内藤新宿は同じ場所で復活。時は、消費拡大政策を推進する田沼意次の時代。かくて内藤新宿は、再び大繁盛する。文化５年（１８０８年）、旅籠屋５０軒、引き手茶屋８０軒。内藤新宿は、品川、板橋、千住と併せて「江戸四宿」と呼ばれるまでになる。飯盛女１５０人（板橋、千住と同じくこの数に限定）。
* 当時の復元模型（新宿歴史博物館）は、他を圧する、内藤新宿の繁栄ぶりを示している。街道の両側にはずらりと旅籠が並ぶ。絵の上に四谷大木戸があるはず。下の右に曲がる道が甲州街道で、直進の道が青梅街道。ここが新宿追分。宿場の右側に玉川上水が流れ、さらにその右には、内藤家下屋敷（新宿御苑）が描かれている。宿場の手前左側には、本陣、脇本陣、問屋場らしき建物が並ぶ。道には、大勢の人が行き交い、荷馬も多数。

■図3　内藤新宿の復元模型：新宿歴史博物館蔵：宿場の右端に玉川上水、内藤下屋敷。手前、右に曲がる甲州街道、直進は青梅街道。新宿追分。

* 長谷川雪旦は、江戸名所図会に四谷内藤新宿の活気ぶりを描く。荷馬を引く人、馬に乗る人、賑やかな店前の風景、店前に「ぼてふり」､拝む僧侶、三味線弾き、米俵を担ぐ人、杵を担ぎ、臼を転がしながら運ぶ人。犬。着飾った婦人、子供、旅人。とにかくあらゆる人々がいきいきと描かれている。

■図4　江戸名所図会：中巻p３０２~３０３:四谷内藤新宿の賑わい

* 内藤新宿から８㎞歩くと下高井戸宿である。内藤新宿ができてから、この宿場は、通り過ぎの宿場、いわゆる間宿と化す。下高井戸宿から僅か２ｋｍで上高井戸宿。下高井戸宿は入り口で、上高井戸宿は出口のようなもの。
* ここから５㎞で国領宿に着く。さらに下布田、上布田、下石原、上石原を「布田五宿」というが、ごく小規模。そして４㎞歩くと府中宿である。

府中宿

* 府中宿は江戸日本橋から７里半の処にある。街道に沿って宿場が並ぶ。まずは、府中宿新宿の家屋（新宿とは、甲州街道の整備で、新しく設けた宿場）。その先に、府中宿脇本陣田中家の屋敷。屋敷を過ぎると、左手に豪壮な鳥居が立っている。潜ると長い参道。両側に欅の大木が林立。その奥には風格のある大国魂神社。武蔵を代表する総社で、鎮守府。街道をさらに進むと商家、旅籠、問屋場が並ぶ。府中宿は大国魂神社の門前町として発展。新宿、番場宿、本宿の順に展開。天保３年（１８４３）、府中宿の人口は３０００人で本陣１軒、脇本陣２軒、旅籠２９軒、商家１４２軒。
* 大国魂神社の創建は4世紀頃と言われている。源氏の八幡太郎義家、頼朝、そして家康ゆかりの神社である。奈良時代に神社の左側に国府が設けられた。国府とは律令制度の施行普及を司る役所である。奈良の都から役人が一家を伴って就任。そのため府中宿は、鎌倉街道などが交錯し、交通の要衝でもあった。

日野宿

* 甲州街道は府中宿を出て田園の中を行くと直に多摩川に着く。「日野の渡し」。江戸期、多摩川には１０を優に越える渡し場があった。対岸について街道を直進するとすぐに日野宿がある。日野は多摩川、浅川の水に恵まれた肥沃地帯。本陣１，脇本陣１，旅籠２０軒。日野宿は、甲州街道軍事的拠点の一つ。宿場の出入り口は直角に曲げられている、枡形構造。ここは、土方歳三の誕生地であり、ここで剣術を教えていた近藤勇以下新撰組主要メンバーの集合地であった。

八王子宿

* 日野宿を出る。甲州街道を西へ。６ｋｍ歩くと八王子宿（横山宿）に着く。ここから甲州街道の両側に、延々１里に渡って宿場が続く。横山宿、八日市宿、本宿、八幡宿、八木宿、子安宿など15宿。個別の宿が隣り合わせに１５も続くのである。この状態から八王子宿の別称、「八王子十五宿」が生まれる。八王子宿の構成は、次の通り。本陣2軒、脇本陣3軒、旅籠屋34軒、問屋場2カ所、宿場の家数1548軒、宿場の人口6026人。内藤新宿と並び甲州街道を代表する宿場である。
* 家康は八王子宿を重要な軍事拠点（江戸防衛の砦）と位置づけ、有能な家臣、大久保長安（佐渡金山、石見銀山の功労者）を抜擢し、八王子宿の設立と甲州街道の整備を担当させる。そして北条氏の八王子城を廃城とし、八王子を幕府直轄領とする。大久保長安は、八王子城麓の城下町住民を甲州街道沿いに移転させ、長大な宿場を創る。家康は、八王子千人同心を組織し、八王子宿の北側に隣接して住まわせる。これが有名な千人同心屋敷である。江戸を守る防備隊。
* 八王子十五宿は、横山宿と八日市宿を中心に栄え、４の付く日は横山宿で、八の付く日は八日市宿で市が立った。八王子名産の絹織物を軸に商売隆盛。一大商業圏を形成する。
* 甲州街道は、半蔵門から四谷大木戸までと八王子宿周辺、日野宿（多摩川、浅川の砦）などが特に江戸防衛を兼ねた目的で整備され、平和になるにつれて物流面で大きく貢献することになる。